
仮面ライダーkiva

エンペラーディケイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーkiva

【Nコード】

N9751E

【作者名】

エンペラーディケイド

【あらすじ】

これは2008年2007年と並行して進む話だ主人公の紅勇輝がファンガイアを倒してゆくストーリー

第1話 いきなりフォルティッシモだぜ（前書き）

仮面ライダー書いてみました

キバを知ってる人じゃないと理解できないところがあるかもしれないが、
せんが。

書いちゃいました

第1話 いきなりフォルティッシモだぜ

2008年… 2007年… この物語は二つの時代を並行して話が進んでいく…

2008年…

急いで 走っている。学ランをきた高校生が走っている。背は高く185センチ位だろうか…

彼、そう、この男こそこの物語の主人公、紅勇輝である。

勇輝は龍神高校の前を走っていた。

学校内に入ると チャイムがなった。

「キンコンガンガンコン」

「やべっ！」

勇輝は素早く下駄箱から上履きを取りだし。走って4階まで かけあがった。

そして、1年4組が見えてきた。

チャイムがなり終わったと同時に彼は

4組に入っていた 「ギリギリセーフ！」

勇輝は言った。

すると。前には担任ではなく。数学の先生がたっていた。

「今のチャイム1時間目の終わりのチャイムだぞ！なにがギリギリセーフだ！」先生が怒鳴った。

「ええ〜！」

勇輝は言った。

「まじかよ〜」

休み時間、ある一人の友達が話してきた。そう、こいつは、俺、天才勇輝様の親友、大牧圭一だ 「お前、遅刻何回目だよ

「ヤバいぞ」

圭一が言った。

「眠い。ずっと夜中までピアノの練習してたからな」

勇輝は言った。

「へえー勇輝ピアノやってるんだ意外だな」

ちよっとぼっちやりした体格の原 浩介が話してきた。

「俺はピアノ好きだからな。」

勇輝は言った。

チャイムがなった。 「二時間目か。理科かやだな」

圭一が言った。

「よし！お休み！」 勇輝が言った。

「こら」

2007年：

急いで走っている。 そいつは。 前方に逃げている人間を追いかけている。

この男は、中学生らしい。 なんとあの大牧圭一だ。

すると前を走っていた人間が急に止まった。 すると。 怪物に変身した。 蜘蛛のような姿をした怪物だ

「ファンガイア！」 圭一は言った。

すると。 武器のようなものをだして。

ムチのように変化して、 怪物に攻撃した。

しかし、相手はそのムチを手でつかみ、 圭一をひきずりよせた。

圭一は怪物に捕まり。 首を締め付けられた。

その時

一人の男が怪物に蹴りをくらわせた。

怪物は、圭一をはなし、 転んだ。

「大丈夫か？」

その男は言った。

「お前は？」

圭一は言った。

すると。怪物が起きあがりこっちに向かってきた。

男は立ち上がり。

怪物に向かっていった。

怪物は殴りかかった。しかし、男はしゃがみ。かわして。

パンチをくらわした。

「ぐはっ」怪物は倒れこんだ。怪物は逃げ去った

「お前は…」

圭一が言った。

「俺は紅勇輝だ…」

ここは。喫茶店

カフェ ドラゴン ダムール 通称カフェドラここに。圭一と勇輝

は入っていった。

そこには。マスターの荒木田と

もう一人客がいた

「やあ。圭一君ご苦労。その人は？」

その男は圭一に話してきた。

「はい、さきほどのファンガイアとの戦いでピンチのところを助けてくれたんです。名前は紅勇輝。すごく強いんですよ。ぜひ。俺たちのすばらしき強さの会にスカウトしたいと思って」

圭一は言った。

「なるほど、私の名は嶋一樹すばらしき強さの会会長だ。すばらしき強さの会はその怪物ファンガイアを倒すために作られた。集まりだ。君のその強さを我々に貸してくれないか？」

会長嶋一樹は言った。

「いいでしょう…この紅勇輝に任しておけばファンガイアは全滅するでしょう。よろしく願いします。」

勇輝は言った。

2008年

勇輝たちの学校は放課後になっていた。

「さて部活だな勇輝」

圭一が言った。

「今日めんどいからサボるわ、じゃ」

勇輝は言った。

「まじかよーまあ俺は水泳部だから先輩優しいけど陸上部は大丈夫なの？」

圭一は言った。

「ああなんか最近めんどくなってきた。」勇輝は言った。

「まあ俺は高跳び最強の天才紅勇輝様だから大丈夫だ！」

勇輝は笑いながら言った。

「大丈夫かーじゃ」

「じゃな」

圭一は部活に 勇輝は帰った。

圭一は部活が終わり、帰宅していた。もう周りは真っ暗だった

「はあつかれた」

圭一は言った。

すると目の前に蜘蛛のファンガイアが現れた。

「ファンガイア！」圭一は武器を取り出して。ファンガイアに切りかかった。

すると。ファンガイアは糸をはいた。

圭一の体が動かなくなった。

「くそっ！」

圭一はあがいた。

ファンガイアが近づいてくる。

「もうだめだ…」

その時、ファンガイアに何かが蹴りかかった。

ファンガイアは回転し転んだ。

「誰だ？」

圭一が言った。

すると前には赤い鎧の人物が立っていた
両肩には鎖が巻いてありベルトをして ベルトにはコウモリみたい
のがついていた。

すると。そいつはファンガイアに襲いかかった。

蹴りをくらわせ、

何回も連続でパンチをくらわせ、ぶっ飛ばした。

「すげえ！」

圭一は言った。

すると。ファンガイアは糸をはいた

「危ない！」

圭一は言った。

しかし、そいつはジャンプをしてかわした。ジャンプ力が半端じゃ
ない百メートル位とんじまった

すると。なにやらフェッスルをコウモリにさした。

「ウエイクアップ！」

コウモリは言った。すると。コウモリは左足の鎖をほどいたする

と。鎧をきた者は ファンガイアに蹴りをいれたすれと

ファンガイアが悲鳴をあげて爆発した

「何者なんだ？」

圭一が言った。

「俺はキバ、仮面ライダーキバだ！」

俺の戦いは最初から最後までフォルティッシモだぜ！」と言うと。

キバは消えた。ここは公園

キバが出てきて人間の姿になった。

「やったなキバット！」人間が言った。キバットと呼ばれるコウ

モリは

「やったな勇輝！」と言った。

そうキバは勇輝だった。

2007年：

勇輝はすばらしき強さの会に選ばれた。 勇輝と圭一は一緒に行動することになった。

「イクサシステムって知ってる？」

圭一は言った。

「なんだそりゃ。」 勇輝は言った。

「なんか会長が極秘に開発してるらしいよ。 ファンガイア撃退システムとかいって」

圭一が言った。

「ほー」

勇輝は言った。

すると。目の前に蜘蛛のファンガイアがあらわれた。

さらにもう一体同じようなファンガイアが現れた

「ファンガイア！」

二人は武器を取り出し、銃にして打った。

しかし効果はなく

二人のファンガイアは襲いかかってきた

すると二人は別々に別れて。 対一の戦いになった。

圭一は剣に武器を変え、切りまくった、しかしファンガイアはよけて糸をはいた。 圭一は動けなくなった。

「しまった！」

その時、圭一の前に 怪物が現れた。

赤い怪物だ だが。 竜のように見える。 まるで竜人だ

「ファンガイア？」 ファンガイアとは少し雰囲気が違う。

圭一は思った。

その竜人らしき怪物はファンガイアに蹴りかかった

竜人はファンガイアにパンチをくらわせ、手から火の玉をだして。

ファンガイアにあてた。

ファンガイアはくらって。 逃げ去った。

「次は俺か…」

圭一が覚悟した

しかしそいつはどこかへ消えた。

「なんだったんだあいつ？」

すると勇輝が来て

「大丈夫か？」

と言った。

「さっきのやつ見たか？」

圭一が言った。

「ああ。俺んところにもきて助けてくれたよなんだったんだ？」

勇輝は言った。

「さあ…」

圭一が言った。

「おっし！次は負けねーぞ！ファンガイアなんてボコボコにしてやる」

2008年 2007年

二つの時代の戦いの幕開けだった…

第1話 いきなりフォルティッシモだぜ（後書き）

次回…キバの秘密が少し明らかに

第2話 疾風迅雷…（前書き）

ついに。第2話です
イクサが初登場！
変身するのは…

第2話 疾風迅雷…

2008年…

「はあ。なんかおもしろえことないかな。」

勇輝は公園のベンチに座っていた
すると。馬のような顔をしたファンガイアが出てきた。

「貴様のライフエナジーもらう…」

ファンガイアが言った。

持っていた剣でファンガイアは攻撃してきた。しかし、受け身で勇輝はかわした。

「へっ！相手が悪かったな。」

すると勇輝はパンチをし、ファンガイアに蹴りをいれた
いくぜ！キバットを呼ぼうとしたその時、弾丸がファンガイアに
当たった。

「なんだ？」

勇輝は言った。

「大丈夫か？」

圭一だった。

圭一が銃を持っていた

「ちっ」

ファンガイアは逃げた。

「ああサンキューなんだその銃？」

勇輝は言った。

「これは。すばらしき強さの会の武器だ」

圭一が言った。

「なんじゃそりゃ？」

勇輝が言った。

「まあ、ファンガイアを倒すために作られた組織だな。しかしお前
すげえな普通初めてファンガイアに会ったら腰抜けて何もできない

はずなのに。」

圭一が言った。

「ま、俺は天才だからな。じゃ俺もそこにいれてくれ」

勇輝が言った。

「まじかよ、まあファンガイアとともに戦ってたからな聞いてみるか：ついてきて」

圭一はカフェドラに 勇輝を連れて行った

「やあ。圭一君ご苦労 その子は？」 嶋が言った。

「こいつは。ファンガイアに勇敢に立ち向かっていったすばらしいやつです。きっと強さの会に必要な人材になるでしょう。名前は紅勇輝です。」

圭一が言った。

「ほう。君がその気ならいいだろう。入るかい？」

嶋が言った。

「はい！よろしく願します」

勇輝が言った。

「早速だが。最近サングラスをかけた人達が襲われた事件が発生している。しかもその人達の傷は人間ではつけられないものだった。ファンガイアの可能性がある調べてほしいんだ」

嶋が言った。

「わかりました。調べてみます！」

2007年：

「イクサシステムがついに開発された。」

嶋はベルトと機械を取り出した。

「このベルトにこのイクサナックルをさすとイクサに変身でき、さらに強い力が得られるだろう。しかし、体にすごい負担がかかる。下手したら命に関わるかもしれない。だから資格者が決まるまで保存しておく。」

嶋は言った。

「嶋さん。俺にやらせてください。今まどファンガイアと戦ってきた俺ならイクサを使いこなせるはず」

圭一は言った。

「まだだめだ。資格者は私が決める。」嶋が言った。

「イクサか？」

勇輝は言った。

2008年：

圭一と勇輝がサングラスをしていた。

これはサングラスを狙ってくるファンガイアをおびき寄せるためだ

ここはある公園だ

「来ないな。ファンガイア」

圭一が言った。

「あせっちゃ。だめだぜ。まずは聞き込みだ、あいつらに聞いてみるか」

と勇輝が言っ

女子高生がたくさんいるところへ駆け寄った。

「なんで女子高生なんだよ。」

圭一が言った。

勇輝は女子高生たちに

「やあ。ちょっと聞きたいことがあるんだけど、最近ここら辺で馬の顔をした怪物を見なかったかい？」
と聞いた。

「さあ。知らないよね？」

「さあ。見たことないな」

女子高生達が言った。

「そっか。ありがとう。それから君たちこれから暇？もし、よかつ

たらみんな俺とちよつと遊ばない？君たちの笑顔を見てたら。誘いたくなっちゃってさ」

勇輝が言った。

「え…いいわよ。そんなこといつて遊ぼう」

女子高生が言った。「じゃまずは…」

勇輝は1人のしりを触ろうとした。

すると。圭一がそれを止め、勇輝を女子高生から離れさせた。勇輝は女子高生に

「悪いねまた今度ね」いいながら別れた

「何すんだよくこれからいいとこだったのに」

勇輝は言った。

「まずはファンガイア倒すんだろ。ナンパしに来たんじゃないんだ」

圭一は言った。

「そうだったな。」勇輝が言った。

その時。

ファンガイアが目の前に現れた。馬のファンガイアだ

「サングラス」

ファンガイアが言った。

「ファンガイア！」圭一と勇輝は剣を取り出し、ファンガイアに切りかかった。しかし、かわされ、

圭一が首を捕まれ。勇輝が突き飛ばされた。

「ぐっ…ぐはっ」

圭一は首をしめられている

「圭一く！」

2007年…

「なんでだ。イクサは俺の…」

圭一が言った。

「なんで、そこまでイクサにこだわる？」

勇輝が言った。

「イクサがあればあいつを…」

圭一が言った。

「なんだ？」

勇輝が言った。

「いや、なんでもない。」

圭一が言った

圭一が勇輝と別れて。歩いていると

ファンガイアが現れた。

「ファンガイア！」圭一は剣をとりだし ファンガイアに切りかかった。

しかし、剣をはたきだされ。ファンガイアは圭一のライフエナジーを吸いとりうとした。

すると。

風の波動がとんできてファンガイアにあたった

「なんだ！」

圭一が言った。

すると。勇輝がいた。

イクサナツクルを持って、

「正義のヒーローが助けに来たぜ。」

勇輝は言った後、

ベルトをつけ。

イクサナツクルを手に

Ready! :

「変身！」

イクサナツクルをベルトにつけた。

Fist on!

すると。勇輝の前に白い鎧が出てきた。勇輝に装置された顔は金色で、白色で 青いラインが両手にかかっていた。

「これがイクサだ！」

ファンガイアが殴りかかってきた。

しかし、イクサはびくともせず、パンチを受けた。イクサはパンチをくらわせ。

回しげりでファンガイアをぶっ飛ばした。

ファンガイアが立ち上がって、向かってこうとしていた。

「そろそろ終わりにするか。」

回しげりでファンガイアをぶっ飛ばした。

「さて、さっさと決めるか。」

イクサはベルトについていたフェッスルを取り出し、イクサナツクルに取り付けた。

IXA nakul risu up! イクサは

イクサナツクルを取り出し、

イクサナツクルから、火の玉が放たれた。

すると。ファンガイアに当たり。

ファンガイアは叫び声と共に、爆発したイクサは変身を解いた。

「すげえ…でもなんで勇輝がイクサを…」

圭一が言った。

ここはカフェドラ

「なんで、勇輝がイクサなんですか？」

俺はずっと前からファンガイアと戦ってきたのに」

圭一が嶋に言った。

「君にはまだ早い。もっと強くなれ。そうすればイクサは君のだ」嶋は言った。

「確かに。イクサは勇輝君のだが、場合によっては圭一君が変身し

てもかまわない。しかし、あくまで勇輝君が資格者だ」
嶋は言った。

「くそ〜！」

圭一は叫んだ。

勇輝は、それをじっと見つめていた。

2008年…

圭一はファンガイアに首をしめられていた。

勇輝は、立ち上がり。

「仕方ない、キバット！」

と言った。すると。キバットが飛んできて勇輝の手に掴まれた。

「よっしゃ〜キバットていくぜ！」

と言うと。

勇輝はキバットを手に噛みつかせ、

「ガブツ！」

キバットが言った

「変身！」

勇輝が言うと。

ベルトが出てきて。ベルトにキバットをさし。

仮面ライダーキバ

になった。

キバはファンガイアに殴りかかって圭一を助け出した。

「うそ：勇輝キバだったんだ。」

圭一は言った。

キバはファンガイアにパンチをしまくった。

そして蹴りをいれようとして避けられた。

すると。ファンガイアは剣を取り出して。

壁に引っ付きながら壁から壁へ移動して キバに剣を振りかざしてきた。

キバはその攻撃をかわしきれず。何回もくらってしまった。

キバが倒れこみ。

ファンガイアが止まった。

「くそ！やりたい放題やりやがって。

勇輝！あれになれ！」

キバットが言った。

「わかった」

キバは言う。

ベルトの横につけてある。フェッスルを 取り出し、

キバットにつけた

「ガルルセイバー！」

キバットが叫び

ガルルセイバーという剣が落ちてきた。 キバがそれを受けとると。

キバの色が青くなった。

キバはガルルフォームになった。

「ぐわー！」

キバは叫んだ。

すると。キバは壁から壁にうつり。

ファンガイアにガルルセイバーで切りつけた。

するとファンガイア が剣で防ぎ。壁に張り付き。壁から壁に移動した

しかし、キバのほうが速く、

ファンガイアに徐々に迫っていき

切りつけた。

するとファンガイアは倒れこんだ

「へっ！俺のスピードに勝てると思ってんのか？バカなやつめ。切り刻んでやる。」

キバが言って、

フェッスルを取り出し、

キバットにつけた
ウエイク！アップ！　と言うと。
キバはガルルセイバーを口につけ
そのままファンガイアに斬りかかった。
するとファンガイアは真っ二つになり
爆発した。

「すごい…」

圭一は言った。

キバは勇輝に戻った。

「へっ！やったぜ」

勇輝は言った。

ここはカフェドラだ

「君にこれを渡す時が来た」

嶋が言った。

「なんですか？」

圭一は尋ねた。

「イクサシステムだついに完成した。これは君がつけるがいい。勇輝君にはあのキバの力があるからな」

嶋が言った。

「嶋さんキバを知ってるんですか？」

圭一が言った。

「まあな。まさか君だったとは、」

嶋が言った。

「じつは俺なんでキバになれるかわかんないんです。嶋さん何か知ってますか？」

勇輝が聞いた。

「わからないのか。」嶋が言った。

「はい、去年の記憶だけなぜか覚えてないんです。気がついたらキバになってたっていうか。」

勇輝が言った。

「ならばその去年になにかあったんだな。」

嶋が言った。

「はい、」勇輝が言った。

「まあ、ゆっくり思い出すがいい。」

嶋は言った。

「それよりよかったなイクサ。一緒に戦えんじゃん。」

勇輝が言った。

「これからよろしくな！」

圭一が言った。

「おう！」

二人は握手をした：

第2話 疾風迅雷…（後書き）

次回、キバ新フォームダブル登場！

第3話 覚醒（前書き）

今回はかなり
新しいの出ています

第3話 覚醒

2008年：

勇輝は歩いていて、しばらく歩いて、

勇輝の頭の中に

何かの呼ぶ音が

聞こえてきた

「ファンガイアか！」

勇輝は言って、

走り出した。

すると。

ファンガイアが人

を襲っていた

「キバット！」

勇輝は叫んだ

「よっしゃ、キバットていくぜ！」

キバットが言った

キバットを勇輝がもち、手に噛ませた

「ガブッ！」

「変身！」

勇輝はキバになった キバはウサギのようなファンガイアに

蹴りかかった

しかし、ファンガイアは気付き

ジャンプしてかわした。

「ジャンプなら負けないぜ」

キバもジャンプして ファンガイアを蹴り落とした。

キバは連続でパンチ を叩きこみ

蹴り飛ばした。

「しゃあない、あとは任せるか」

キバは言った

するとキバの後ろから圭一が現れたベルトを巻き、

イクサナツクルを持っていた。

Ready!

イクサナツクルを手当てた。

「変身！」

圭一が言って、

イクサナツクルをベルトにつけた

First On!

すると。

圭一はイクサになった。

すると。

顔の仮面が分離し

バーストモードにな

った。

「いくぜ。初変身だ」

イクサはイクサカリバーを取りだし

ガンモードに

してファンガイアに銃弾を撃ち込んだ

すると。ファンガイアは怯んだ

イクサカリバー

をソードモードに

変え。ファンガイアを切りまくった

「ぐはっ！」

ファンガイアは倒れた。

イクサはフェッスルをイクサナツクルにつけ

IXA Carrier Rizu

A u p

と、なり

イクサカリバーに

たくさんの電撃がたまり。

ファンガイアを斬りつけた

すると。ファンガイアは爆発した

イクサは変身を解いた。

「やったな。圭一」キバが変身を解いて 言った。

「ああ！」

圭一は言った。

2007年：

「なんで。俺がイクサじゃないんだ」

圭一は言った。

圭一は公園のベンチ に座っていた。

圭一は立ち上がり

「なら、ファンガイアを倒しまくって、イクサが俺にふさわしい事

を証明してやる」

そう言って。歩いていった

しばらく歩くと

人がたくさん逃げて来るのが見えた。

剣を持った。

セミのようなファンガイアがいた。

「ファンガイア！」

圭一は言って

剣でファンガイアに 斬りかかった

しかし、

ファンガイアの剣に軽く弾き飛ばされ。

圭一もふっ飛んだ。

「待て！ファンガイア！」

勇輝が走ってきた。 「勇輝！」

圭一は叫んだ。

勇輝はイクサナツクルを取りだし
手にあてた

Ready!

「変身!」

fist on!

勇輝はイクサになった。

イクサは蹴りかかって。

ファンガイアの剣を弾き落とした。

パンチを連打し、

蹴り飛ばした

しかし、ファンガイアは姿を消した。

「どこ行きやがった」

勇輝が言った。

すると、ファンガイアが後ろから剣で斬りかかってきた

「ぐはっ」

イクサはこけた

「こんなにやろーなめたまねしやがって」

イクサは言って、

ファンガイアを殴り飛ばした

「じゃあな」

そう言って

フェッスルをイクサナツクルにつけた

IXA nacuru rizu upイクサは

ナツクルから火の玉を出した。

ブロウクンフアングだ

ブロウクンフアングはファンガイアに

当たって。

ファンガイアは遠くへ飛ばされた

「ふう」

イクサがため息を

ついたその時、

イクサから煙がでて 音がなり始めた

「ぐはっ」

イクサはそのまま

倒れ、変身が解けた 「勇輝！大丈夫か！」

圭一が言った。

ここは

とある病院

ベッドには

勇輝が寝ている

看病しているのは

圭一だ

「どうだ？勇輝君の調子は？」

嶋がきた

「はい、ずっと意識不明です。嶋さん、なんでこんなになっちゃったんですか？」

圭一が言った。

「じつは、イクサは長時間使い続けると体に負担がかかり、命に関わるんだ。

だから、勇輝は言ってたよ。圭一にはそんな危険な事させたくないって」

嶋が言った。

「勇輝、俺のためにそんな危険をおかして…」

圭一が言った。

「まあ、まだ死にはしないだろう。だがこれ以上は普通の人間には危険だ」

嶋は言った

「あと、ファンガイアが現れた。至急向かってくれ」

嶋は言った

「わかりました」

圭一は言って、
行こうとした。

「勇輝、俺のためにすまなかった。そんな事思ってくれてたなんて、
だけど。友達が危険を覚悟して戦ったんだ。
俺だって、戦わなきゃ。」

圭一は言って、
イクサナツクルを
取り、病院をあとにした。

2008年：

勇輝は陸上部に出ていた。

アップで校庭3周

100メートルを4本走った

「よっしゃ、高跳びだ、今日の俺はかなりクライマックスだぜ」
勇輝は言った。

「あんま、練習来てないのに跳べんのかよ？」

同じ 高跳びの

亮が言った。

「大丈夫だよ」

勇輝は言って、

高跳びのバーを

いきなり。2メートルにした。

「いくぜ」

勇輝は言い。

助走して、跳んだ。跳べた

「ヤバいな相変わらず、天才だな」
亮が言った。

「ああ、知ってる。俺は天才だ、」

勇輝は言った。

その時、

叫び声が聞こえた。銃を持ったファンガイアが暴れていた
勇輝はファンガイアに近づき

「キバット！」

と言った。

「よっしゃ、キバッテいくぜガブっ」

キバットは言った

「変身」

キバになった

キバは殴りかかろうとした

しかし、ファンガイアは銃をキバに打って

キバは倒れた。

「くそっ！」

キバは向かっていったが銃弾が激しくて近づけない。
その頃。

プールでは

圭一たち、水泳部が泳いでいた

「はぁ。一休みするか」

圭一が言った。
すると

目の前に

剣を持ったファンガイアが現れた

「みんな！逃げろ！」

圭一は言う

「わぁー」

みんな逃げた

圭一はファンガイアに向かって行って
イクサナツクルを取り出した

Ready!

「変身!」

fist on

圭一はイクサに変身したイクサカリバーを剣モードにし

ファンガイアに斬りかかった

ファンガイアは剣で受け止めたが、

イクサが剣をはじいてとばした

「よし!」

イクサは言った。

キバは苦戦していた ファンガイアの銃弾に追い詰められていた

「くそっ! これじゃ近づくねえ」

キバットが言った。 その時。

野球ボールが飛んできてファンガイアに当たった

「打ち込めー」

野球部がボールを投げたり打ったりはして。 ファンガイアに当たっていた。

「おお! やるなあいつら」

キバットは言った。

サッカーボールも飛んできた

サッカー部もボールを蹴って当てている 「どけー!」

陸上部の先輩がハンマー投げで回りながらファンガイアに突っ込んでいった

「ぐはっ」

ファンガイアはこけた

「今だ! 勇輝!」

キバットがいうと

キバが蹴りかかって パンチを打ち込んだ

しかし、ファンガイアは銃弾をまた打ってきた

「くそっ! ならあいつだ」

キバはフェッスルを取り出し、
キバットにつけた

「バッシュァーマグナム！」

キバットが叫ぶと

銃が落ちてきて

それをキバが手にすると緑色に変身した　バッシュァーフォームだ

「僕！参上！」

キバは銃で水の弾を　打った。

すると。ファンガイアに直撃し、

ファンガイアは倒れた。

ファンガイアはすぐに立ち上がり銃弾を打ってきた

しかし、

キバは、全ての銃弾をバッシュァーマグナムで打って碎いた。

「僕に勝てると思ってんの？」

キバは言った。

すると。ファンガイアの回りが水のようになった。

キバはアクアフィールドを作った。

キバはそれにのり

滑るようにして

ファンガイアの回りを回り、

水の銃弾を撃ちまくった

ファンガイアも

銃弾で撃つが全て交わされてしまう

ファンガイアは撃たれまくり

倒れた

キバはバッシュァーマグナムをキバットにさし

「バッシュァーフェイク！」

と言った

すると。

バッシュァーマグナムに水のエネルギーが集中し、

でかい水の塊を発射した
すると。

ファンガイアに当たり。

ファンガイアは

爆発した

「よっしゃ！決まったぜ」

キバは言った。

イクサは

ファンガイアをプールの中へ投げ飛ばした

「水中ならこっちのもんだ！」

イクサは言って、

プールに飛び込んだ イクサは

プールに潜っているファンガイアに向かって

ものすごい速さで

泳いで行った

イクサはイクサカリバー

で斬り、

さらに、壁を蹴って ターンをして

また斬りかかった

それを2度繰り返し、

ファンガイアは

陸に飛ばされた

イクサは陸に上がり 「いくぜ！」

といって、

フェッスルを

イクサナツクルにつけた

I X A C a r i b b e e n R a i z u p

イクサは

イクサカリバーを取り出し、

電撃の貯まった

イクサカリバーで

ファンガイア

を斬った。

すると。ファンガイアは爆発した

「よし！」

イクサは言って、

圭一になった

「大丈夫か？」

勇輝がきて言った。

「大丈夫だったよそっちは？」

圭一は言った

「余裕だよ、ま、この天才勇輝様に勝てるやつはいない！」

勇輝は言った。

「とりあえず、倒せて良かった」

圭一は言った。

2007年：

圭一はファンガイア に会った。

「ファンガイア！倒してやる！」

圭一は言って、

イクサナツクルを取り出した。

しかし、

ファンガイアが突っ込んできて、

圭一は吹っ飛ばされた。

圭一はファンガイアに殴られ気絶した

「てめえ！俺の友達になにしてんだ」

勇輝がいつの間にかいた

勇輝はイクサナックルを拾った
Pea day!
変身!

F i s t o n

イクサに変身した
イクサはファンガイアに殴りかかった。ファンガイアも殴らってきた。

しかし、

イクサは交わし
回し蹴りをくらわした
その時、

イクサが倒れこんだ

「まだ、完全に回復してないか」
イクサは言って、
変身を解いた。

「いいだろう。ここで命を落とすにはいけないからな。みせてやる。
俺の真の姿を」

勇輝が言うと。

叫び出し、

勇輝は怪物に変身した

赤い竜のような
怪物。

そう、あるとき
ファンガイアから圭一を助けた。
赤い竜人であった

「俺は竜族の戦士勇輝だ!」

竜人は叫んだ。
ファンガイアに向かって行って

殴りかかり

パンチをたくさん打ち込んだ

ファンガイアは反撃しようにも

竜人の攻撃が

激しく、速いので

手が出せない

竜人は、

ファンガイアを蹴りとばすと

右足に炎が貯まった その足でファンガイアに蹴りかかった

ファンガイアは爆発した

竜人は勇輝に

戻った。

「大丈夫か？」

勇輝は圭一に言った。

「ああ、大丈夫だ」

圭一は言った。

「頼む！イクサを俺と認めてくれ。」

勇輝は言った。

「仕方ない。親友の頼みなら」

圭一は言った。

「ありがとう…」

勇輝は言った。

2008年：

「はあ！部活疲れた！」

勇輝が言った。

「疲れたなまた、明日も学校だぜ」

圭一は言った。

「やだな～！遊びたいな。まあ、圭一がいるから楽しいけど」

勇輝は言った。

「ああ！」

圭一は言った。

「じゃあな！また明日！」

二人は別れた…

第3話 覚醒（後書き）

次回はドツガフォーム登場予定

第4話、怪力、そして、かつてない強敵の前触れ（前書き）

見にくいかもしれませんが。

すみません。

ついに。ドツガフォーム登場！

第4話、怪力、そして、かつてない強敵の前触れ

2008年：

カフェドラで

勇輝は、座っていた
すると。

一人の男が

勇輝の前の席に座った

「やあ、待たせたな」

そいつは言った。

「光陽、なんだ話って？」

勇輝は言った。

その男は勇輝の

クラスメートの

光陽だ

「じつは。合コンの話があるんだ。三人いてさ。今、参加するやつ
探してるんだかわいい娘いるぜ。よかったら来ない？」

光陽が言った。

「まじで！行く！行く！」

勇輝は言った。

「あと一人必要なんだが…」

光陽が言った

「圭一はどうだ？」

勇輝は言った。

「いいね。呼ぶか」

光陽が言った。

光陽はメールで圭一をカフェドラによんだ

「なんだ？話って？」

圭一が来て言った。

「合コン行かない？」

光陽が言った。

「うーん…」

圭一は言った。

「頼む！人がいないんだ！」

光陽が言った。

「じゃあない行くか。」

圭一は言った。

「よっしゃー！」

勇輝は言った。

2007年：

勇輝は散歩していた 「つまんねえ。なんか面白いことないかな」

勇輝は言った。

「ならば、腕試しでもやらないか？」

男が勇輝の前に出てきた。

「なんだ、おめえ？」

勇輝は言った。

「貴様がイクサか…その力見せて見ろ！」

男が言った。

「お前！なんでイクサを知ってるんだ！」

勇輝は言った。

すると

男は怪物に変身した 色は全身青、

まるで狼男だ

「なに？ファンガイア？いや、違う…」 勇輝は言った。

「あんな奴らと一緒にするな！俺はウルフェン族のガルルだ！」

狼男ことガルルが言った。

「なに！ちくしょう」

勇輝は言って、
イクサナツクルを取り出し。

Ready

「変身！」

first on

イクサに変身した。ガルルは飛び付いてきた
しかし、イクサは交わし

後ろに回り込んで
パンチをしようと
した。

しかし、

ジャンプして交わされ。

キックをくらった

イクサは倒れた。

「くそっ！ジャンプなら負けないぜ！」イクサはジャンプして
キックを食らわしたら

「くっ！」

ガルルはふっ飛んだ とどめだ。

イクサナツクルを

取り出し。

IXA NACURU RIZU upフエッスルを取り出しつけた

倒れているガルルに 向かって、

行った。

その時。

後ろから液状の
物が飛んできて

イクサに当たった。「ぐはっ！なんだ」イクサは言った。
後ろを見ると

緑色の小柄の

怪物と

巨体の紫色の怪物が立っていた。

「ここまでだ。イクサ。お前の実力はよくわかった。」

ガルルは変身を解いて人間になった。
すると。

さっきの怪物二人が 人間になった。

緑色の怪物は

男の子になった。

紫の巨体の怪物は

若者になった

ガルルは言った。

「俺の事は普段次郎と呼んでくれ。」

「僕はラモン」

子供が言った。

「オ、レ、は、力」若者が言った。

「でもなんで。俺を狙った？」

勇輝は変身を解いて言った。

「お前が、ファンガイアと戦えるか試してみたんだ。力を貸せ。どうしても倒さなければならぬ奴がいる…」

次郎が言った。

2008年：

レストランに

勇輝達は集まっていた

前には三人女子が

こっちには光陽

圭一、勇輝という

順番で並んで座っていた。

女子たちは右から

「ちかでーす」

「はるかでーす」

「はるなでーす」

と言った。

全員スタイル抜群だ 勇輝たちも

「こ、光陽です」

「け、圭一です」

「勇輝でーす！」

と言った。

「じゃまずはカンパーイ！」

勇輝が言った。

「光陽君て。なんか得意なことあるの？」

ちかが聞いた。

「パソコンは得意かな…あ、あと水泳も」

光陽が言った。

「へえーすごいね」

ちかが言った。

光陽は顔を赤くした 「圭一君だったよね？圭一君は部活なんかやってる？」

はるかが聞いた。

「水泳だよ」

圭一は言った。

「すごいねーそれにちよつとかわいいね」

はるかは言った。

圭一は顔を赤くした 「勇輝君。なんか部活やってんの？」

はるなが聞いた。

「ああ、陸上部で高跳びやってんだ。今度俺の天才的な跳躍を見せてやる」

勇輝が言った。

「へえー。勇輝君で陸上やってるんだなんか、最近いい事とかあつ

た？」

はるなが言った。

「ああ、あったさ君に会えた事…運命の出会いっていうのかな？」

勇輝が言った。

「えっ…運命…」

はるなが言った

「そうだよ、君に会えて嬉しいよ、俺と付き合わない？」

勇輝は言いながら

はるなの隣に行った 「えっ…いいよ…」 はるなは言った

「じゃあ。もつとそばに行っていかな？」

勇輝は言うとはるなを抱き締めた

「いいよ…だって運命の人だもん」

はるなは言って

抱きしめあった

「ちょっとまてい！」

圭一が言った。

「お前らやりすぎだー」

光陽が言った。

「ちえっ。じゃアドレス交換してくれ」 勇輝がはるなに言った。

「いいよ」

はるなは言った。

「ああーずるいはるな。いいな」

はるかは言った。

「私、勇輝君狙ってたのに」

ちかは言った。

「まじ…」

光陽と圭一は言った

その時。

窓がわれ

ファンガイアがでてきた。

他のファンガイアと比べ体がでかい

「ファンガイア！」勇輝は言った。

「圭一、みんなを安全なところへ頼む！俺はこいつを倒す！」

勇輝が言う

「わかった。任せたぜ、こっちだ」

圭一はみんなを誘導した

「キバット！」

勇輝はよんだ

「よっしゃーキバツていくぜ！ガブツ！」

キバットが言って

「変身」

勇輝はキバになった　キバはファンガイアにパンチを連続でくらわした。

しかし、

ファンガイアはびくともしない

「何！」

キバは言った。

すると。ファンガイアはパンチを一発してきた。

キバはよけた

しかし、

今のパンチが床に

大穴を開けた

「なんて。パワーだあいつ。ならこっちは素早さだ」

キバットは言って

キバはフェッスルを　キバットにつけた

「ガルルセイバー！」

キバはガルルフォームになった

キバはガルルセイバーを振りかざし。

ファンガイアに

斬りかかった

しかし、

ファンガイアは

キックで

ガルルセイバーを弾き飛ばした

「何！」

キバは言った。

ファンガイアがパンチをしてきた

キバはくらって

遠くへ吹っ飛ばされた

ファンガイアはにげて行った

「くそー」

キバは言った。

2007年：

次郎、ラモン、力

と勇輝は話していた「俺たちはファンガイアに自分の種族を滅ぼされた。それで別々の種族の俺たちが組み、ファンガイアを倒している

しかし、

俺たちでも全く

かなわない奴がいる それは

ファンガイアの上位四人の

チェックメイト4

の一人

ルークだ

やつには勝てん。

だから、俺たちはルークを倒せるやつを探していた

そして、イクサの存在を知り、

見つけたんだ。

頼む！俺たちとルークを倒してくれ！」次郎が言った。

「なるほど、それで。俺が人間じゃないのはわかるな？」

勇輝は言った。

「ああ、竜族だろ？確かファンガイアにやられたんだったな」
次郎は言った。

「ああ、俺はキングにやられた」

勇輝は言った

「なに！キングだと！」

三人は叫んだ

「ああ、やつは強い！いつか俺の手で」 勇輝は言った。

「なるほど、だがルークを倒せなければキングは倒せない。戦ってくれるか？」次郎は言った

「ああ、いいぜ。ルークを倒すぞ」

勇輝は言った

2008年：

「よし。光陽たちは逃がしたぞ勇輝大丈夫かな」
圭一が言った。

すると。さっきの

ファンガイアが現れた

「くっきたか」

イクサナツクルを

取り出し、

Ready

「変身」

first on

イクサになった

イクサカリバー

を出し、

斬りかかった。

しかし、

ファンガイアには効かず

ファンガイアにイクサは殴られ吹っ飛ばされた

「待て！そいつは俺が倒す！」

勇輝がきた

「変身」

キバになった

キバは蹴りかかった　しかし、

ファンガイアは

足をつかみ

キバを投げ飛ばした「くそっならあいつだ」

キバットは言った。キバは

紫色のフェッスルを　取り出し、

キバットにつけた

「ドツガハンマー！」

キバットは言った

でかいハンマー

が落ちてきて

キバの体が紫に変わり。

ドツガフォームに

なった。

キバはハンマーを

ファンガイアに降り下ろした

ファンガイアはつかもうとしたが

ハンマーにそのまま　押し潰された

「すごい」

イクサが言った。

キバは

ドツガハンマー

を何回もあて

ファンガイアをふっ飛ばした

キバはドツガハンマーをキバットにさし 「ドツガバイト！」とキバットが叫んだ。
すると。

ドツガハンマーの
真ん中の目が開いた。

するとファンガイアが動かなくなった
ドツガハンマーは

分離し、

先の部分がファンガイアに向かってキバが振り回すとおりに 動き。

ファンガイアに

何回も当てて

先がドツガハンマーにもどり

ファンガイアが

爆発した。

「や、っ、た、」

キバは言った。

「ふん。あれがキバか…面白い」

謎の男が笑いながら呟いた…

2007年…

「さっき。何話してたの？」

圭一が言った

「いや、なにも合コンの話だよ断ったが」

勇輝が言った

「なんだ。」

圭一は言った

「ルーク…果たして勝てるのか俺たちはかなり強そうだが」 勇輝は
心の中で思った

2008年：

「はるなちゃんかわいかったな」

勇輝は言った

「よかったじゃん。付き合えて」

圭一は言った。

「ああ、デートでも誘うか」

勇輝は言った：

第4話、怪力、そして、かつてない強敵の前触れ（後書き）

次回V S ルーク

第5話…ルークVSてんこもり（前書き）

やっとルーク登場！

第5話：ルークVSてんこもり

2008年：

「はあ。疲れた」

勇輝は言った

部活帰りらしい

「だって、お前高跳び100回連続で跳び続けたんだろ？死ぬだろ」

圭一は言った

「俺、強くなんなきゃ誰かを守る位」

勇輝は言った

「だよな。俺も」

圭一は言った

すると

前に女子高生が数人歩いていた

「君たち、確か龍神高校の人だね？あーかわいいなこんなかわいい娘たちがおんなじ高校にいたなんて。あ、俺勇輝、よろしく…」

勇輝は話し続けた

「だめだこりゃ」

圭一はため息をついた

2007年：

「ルーク…」

勇輝が言った

「次郎たちが言ってた強いやつ倒してやる」
勇輝は言った

ここはある公園

「なにか面白いゲームはないのか？」

男が言った

男はピアスをしている女性をみた

「新しいゲームの始まりだ」

男は言って、

腕時計のタイマーを押した
すると、

男はファンガイアに 変身した

ライオンファンガイアだ

両肩には

ラッパのようなものがついていた
すると、

ピアスをつけた女性に襲いかかり
女性は倒れた

勇輝は歩いていた

すると、

ピアスをした男とすれ違った

すると

ピアスの男の前に

あのファンガイアの男が出てきた

「みつけた」

男は言って

ファンガイアに

なった

勇輝が振り向くと

ピアスの男が倒れて いた

「てめえー！」

勇輝は言って

イクサナツクル

をとりだし

Ready!

「変身！」

first on!

イクサになった

ファンガイアに

殴りかかった

しかし、

全く効いてない

蹴ってもびくとも

しない

ファンガイアは

イクサを突き飛ばし

黒い小さな玉を

連続で打ちだし

イクサにあてた

「ぐわー」

イクサは倒れ

勇輝になった

「てめえ何者だ！」

勇輝は言った

「俺はチェックメイトフォーの一人ルークだ！」

ファンガイアは言った

「ルーク！」

勇輝はいった

「ちっタイムプレーは終わるか俺は俺にご褒美を与える」

ファンガイアは言って人間になって去っていった

「ちくしょ〜」

勇輝は言った。

2008年：

夜、勇輝は家で

寝ていた

すると、頭の中に音が流れてきた

「ファンガイアか」勇輝は起きて

外へでた

「よっしゃーキバツていくぜ」

キバットもでてきた

すると、

ファンガイアが人を襲っていた

「キバット！」

勇輝は言った

「よっしゃーがぶっ！」

キバットは勇輝の手にかぶりついた

「変身」

勇輝はキバになった キバはファンガイア にパンチをしまくった
しかし、

ファンガイアはびくともしない

蹴ったが足を掴まれ 吹っ飛ばされた

「これならどうだ」

キバットは言った

キバはフエッスルを

取りだし

キバットにつけた

「ガルルセイバー」

キバはガルルフォームになった

「噛み砕いてくれるわ!」

キバは言って

ファンガイアに斬りかかった

しかし、

かわされ

ファンガイアにパンチをくらった

「ぐはっ」

キバは倒れた

「バッシュァーマグナム!」

キバットにフエッスルをさし

バッシュァーフォームになった

「君の好きにはさせないよ」

キバは銃で

水の弾を打ちまくった

しかし、

ファンガイアにはかわされ。

黒い小さな玉を

連続で投げ続けられた

キバは倒れた

「ドッガハンマー」 キバットが言って

ドッガフォームになった

ドッガハンマーで

ファンガイアに
攻撃したが
かわされ。

連続でパンチをくらい
倒れた

「俺はルーク貴様らの攻撃など通じん！」
ファンガイアが言った。

「くそ！」

キバは勇輝になった
ルークはその場を去っていった

2007年：

圭一と勇輝は
話しながら

歩いていた

「なに！ルークと戦った？」

圭一は言った。

「ああ。めっちゃ強かった」

勇輝は言った

「よし」

圭一は言った

「俺にイクサを貸してくれ。殺された兄貴のために仇がとりたいたいんだ」

圭一は言った

「だめだ。イクサは危険すぎる。」

勇輝は言った。

そこへルークがきた

「ルーク！兄貴の仇！」

圭一は叫んで

ルークに剣で斬りかかった。

ルークはファンガイアになった

圭一は斬りまくった

しかし、

ルークには全くくらわない

ルークは

圭一の腹を殴った

圭一は気絶した

「てめえ」

勇輝は言って、

イクサナツクルを

とりだし

Ready

「変身」

fight on

勇輝はイクサに

変身した

イクサは殴りかかったが弾きとばされた

ルークは

黒い玉をたくさん

打ち、イクサに当てた

イクサは倒れ

勇輝にもどった

「くそ」

勇輝はいった

ルークは去っていった…

2008年：

ここはカフェドラ

「ルーク：強かったんだろ？どうする？」

圭一は言った。

「ここは二人同時にかかろう。そうすれば倒せるはずだ。俺たちの友情の力で！」

勇輝は言った。

「よし！やろうぜ」

圭一は言った。

2007年：

ここはカフェドラだ

「ルーク：強いな」

勇輝は言った。

「イクサでもだめか」

次郎が出てきて言った。

「ああ。強かったどうすればいいんだ」

勇輝が言った

「なあに、こんだけ人数がいれば勝てる例え、ルークといえでも」
次郎は言った。

力トラモンはうなずいた

「ああ。次こそ勝つ！」

2008年：

ルークが歩いていた 「なんかおもしろいことはないのか」

「あるさ」

勇輝がルークの前に出てきた

「今度は負けない！キバット！」

勇輝は言った。

「ガブっ」

変身！

キバになった

すると

ルークの後ろに

圭一がいた

Ready

「変身」

fist on

イクサになった

キバがルークに殴りかかった

しかし、

かわされた

後ろからイクサが

イクサカリバー

で斬りつけた

ルークはくらった

しかし、

ルークはイクサに

パンチをくらわした 「ぐはっ」

イクサは倒れた

「ならば。ドッガハンマー！」

キバットが叫び

キバはドッガフォーム

になった

イクサはフェッスルを取りだし

イクサナツクルにつけた

「ガルルフェイク」すると

ガルルセイバーが

イクサの手に落ちてきた

「勇輝、力借りるぜ」

イクサが言った

「おう！い、く、ぜ」

キバはドツガハンマーを振り上げ

ルークに当てた

ルークは倒れ、

その倒れた

ルークにイクサが

ガルルセイバーで斬りまくった

「ぐはっ」

ルークは言って

ルークは素早く立ち上がり。

イクサとキバの首を締めて持ち上げた

「がはっぐはっ」

イクサとキバは言った

すると、キバがフェッスルを三個取りだしキバットにつけた

「ガルルセイバー」

「バッシヤーマグナム」

「ドツガハンマー」

すると

ガルルフォームの青の鎧が右手に

バッシヤーフォームの緑の手が左手に

ドツガフォームの体が合体した

ドガバキフォームだ キバはドツガハンマーを取りだし
ルークを叩きまくった
ルークは倒れた

すると、

右手にガルルセイバー

左手にバツシャーマグナムを持ち

下がアクアフィールドになった

キバは滑るように

ルークの周りを回りながら水の弾をうちまくり

ガルルセイバーで斬りつけた

「ぐはっ」

ルークはまた倒れた。

ルークは立ち上がり 黒い玉を連発してきた

しかし、

キバは全て弾きとばした

「なに！」

ルークは言った

「痛え……」

キバは言った。

キバはフェッスルを取りだし キバットにつけた

「ウェイクアップ」

キバットは言った

キバは右足のカテナをはずし

飛び上がった

ルークに向かって

蹴りをいれた

「今だ！」

イクサカリバーライズアップ！

イクサは言って

イクサカリバーに
電気をため

ルークに斬りつけた

「ぐはっ」

ルークは爆発した

「倒したのか？」

イクサは言った

「ちっ！逃げられた」

キバは言った

キバは変身を解いた
しかし、

勇輝は倒れた

「勇輝！」

イクサは圭一になり、勇輝に近寄った

「大丈夫だ！あのフォームはかなり体力使うからな」

勇輝は言った

「よし！遊びに行くか！」

勇輝は言った

「おう！」

圭一は言った

「まずは。女の子探しだ！」

勇輝は言った

「お前はるなはどうした？」

圭一は言った。

「ああ、はるなちゃん今会いに行くよ」

勇輝は言って

走り出した

「ああ、待てよ」

圭一も走り出した

二人は走り去っていった：

第6話…もう一人の天才（前書き）

やっと書けました。いろいろ忙しくてまあでもいつもより長めに書いたつもりです

意外なライダー登場

第6話…もう一人の天才

2008年…

勇輝はホースファンガイアを追いかけていた

「まてや〜」

勇輝はいった

「キバット！」

そう言うと

キバットが飛んできて

ファンガイアに

攻撃した

「よっしゃ〜キバツていくぜ」

キバットは

言って、

勇輝の手につかまれ 「ガブ！」

キバットは勇輝の手をかんだ

「変身」

キバに変身した

キバはホースファンガイアに飛びかかった

キバはファンガイアを殴って蹴りまくった

「ぐはっ」

ファンガイアは

倒れた

「よっしゃー一気に決めるぜ」

キバットは言った

その時、

もう一体ホースファンガイアがでてきた
キバに剣で斬った

「なに！」

キバは倒れた

キバはすぐに

立ち上がり

一体に殴りかかった
しかし

後ろからもう一体
のファンガイアが
キバを剣で斬った

「ちくしょーこれじゃ倒せねー」

キバットが言った

その時

白いこうもりみたいなやつが飛んできて
ファンガイア

2体を攻撃した

「なんだ？」

勇輝は言った

「いくぜ。相棒」

その白いこうもりは
言った

すると

一人の男が歩いてきた

年齢は勇輝と同じくらいっぽい

「へっ、雑魚どもがこの俺様が倒してやるぜ」

その男は言った

「行くぜ。レイキバット！」

男は言って

「よし、行くか！」

レイキバットと

呼ばれた白いこうもりが男につかまれた

「ガブッ」

レイキバットは

男の手にかみついた

「変身」

すると。

男は白いライダー
になっていた

「行くぜ！」

ライダーは

言って、一人のホースファンガイアに殴りかかった。

ホースファンガイアは応戦するが

ライダーが

パンチで剣を落とさせて。

2、3発打ち込み

ファンガイアは

吹っ飛ばされた

「なんだ？あいつはすげえパンチ力だ」

キバットは言った

すると。

もう一体の

ファンガイアがライダーに向かって
殴りかかった

しかし、

ライダーはそれを交わし

蹴りをファンガイアにくらわせた

さっき

ライダーに吹っ飛ばされたファンガイアも立ち上がり
二人のファンガイアがライダーに殴りかかった

しかし、

ライダーはジャンプで交わし
ファンガイア二人は
ぶつかった

「そろそろ決めるか」

ライダーは言った

フェッスル

を取り出し

ベルトについてる

レイキバットにつけた

「ウェイクアップ！」

レイキバットは

言った

すると。

ライダーの両手に
でかい爪が生えた

その二つの爪は氷を帯びていた

ライダーは

走りだし

ファンガイアを

爪で一体に二回

もう一体に一回切りつけた

すると

ファンガイアは爆発 した

しかし、

一体は逃げていった

キバがライダーに

向かっていった

「お前何者だ？」

キバは言った

「俺は仮面ライダーレイ……」

2007年……

勇輝が

カフェドラにいた

「俺は人間がいい。人間でいたい」

勇輝はぶつくさ言っていた

「なんか言ったか？」

隣に座ってた

圭一が言った

「いや、なんでもない」

勇輝は言った

2008年……

ここはカフェドラ

「この子は青空の会のライダーシステムレイシステムの装着者、優河君だ、今日から一緒に戦ってもらうことになった。みんなよろしく頼む」

嶋は言った

「俺！優河だ！よろしく！この天才優河様が全てのファンガイアは俺が倒してやるぜ」

優河は言った。

「ほう。天才か、

まあ超天才この勇輝様にはとうてい勝てないだろうが。よろしくな」
勇輝は言った

「なに！ならこっちは超超天才だ」

優河は言った

「ならば俺は超超超超超超超超超天才だ」

勇輝は言った

「ならば超超…」

優河が言い

「まてえきりがない！」

圭一は言った

「早速だがファンガイアが一人逃げたようだな。そいつの始末を頼む」

嶋が言った

「安心してくださいこの最強優河様がファンガイアを倒して見せます」

優河は言った。

「へっ！ならどっちがファンガイアを先に倒すかやるか？」

勇輝は言った

「いいぜ。まあ俺が勝つだろうが」

優河は言った。

「三人で行ってくれ」

嶋は言った

「ちえ」

勇輝と優河は言った

「この二人似てんなあ」

圭一は心の中で思った

2007年：

「はあ。暇だ」

勇輝は野原で寝ていた

「きゃー」

叫び声がした

勇輝は起きてみると ファンガイアが人間を追いかけていた

「ファンガイア！」

勇輝はイクサナツクルを取り出し

イクサナツクルから 衝撃波を放ち

ファンガイアがこけた。

Ready

「変身」

first on

勇輝はイクサになった

イクサはファンガイアにパンチをした

ファンガイアは食らい

ファンガイアもイクサにパンチした

イクサはこけた

「こんにゃろー」

イクサは蹴りまくった

ファンガイアは
くらい倒れた

「これで終わりだ」イクサはフェッスルを取り出し、イクサナツク
ルにつけた

I x a n a k u r u
r a i s u u p

イクサはイクサナツクルから火の玉を繰り出した

「ぐわゝ」

ファンガイアは当たり爆発した

「ふう」

イクサは変身解除した

「大丈夫か？」

圭一が来た

「ああ」

勇輝は言った

2008年：

勇輝と優河と圭一は 歩いていた

「はあ。ファンガイアどこいんだよ」

勇輝は言った

「本当だよ飽きてきた」

優河は言った

「お前らさっきまでのやる気どうしたんだ？」

圭一は言った

「いやゝだって。いないん…お！」

勇輝は叫んだ

「ああ！」

優河も叫んだ

「なんだ！ファンガイアいたのか？」

圭一は言った

「あの娘達かわいい！」

勇輝は言った。

「は？なんだよ！ファンガイアじゃないのか！真面目に探してくれよ、なく優河」

圭一は言った

「うわ！めっちゃかわいいやん」

優河は言った

「へ？」

圭一は言った

「ねえねえ。今夜暇？」

勇輝と優河は数人固まってる女子高生に向かって行った。

「ちよつとまてえ」

圭一は言った。

2007年：

次郎。ラモン、力と 勇輝は話していた。

「なあ。俺、いいのかなあ人間と暮らしてて」

勇輝は言った

「なにいつてんだ。俺達は全滅危機の種族なんだ。人間と暮らし、ファンガイアを倒すしかない」

次郎は言った

「だよな」

勇輝は言った

「ねえねえ。僕たち四人組んだら最強だよね？」
ラモンは言った

「オ。レた、ちつ、よ。い？」

力が言った

「ああ、多分な力を合わせファンガイアを叩き潰す」
次郎が言った。

「おう！」

四人は言った

2008年：

勇輝達は学校にいた 教室で朝のHRだ

「今日は転校生を紹介する」

先生は言った

「へえ転校生か」

圭一は言った

「かわいい娘かな？」

勇輝は言った

「おめえは女の子の事しか頭にないのか」
圭一は言った。
すると、

教室に一人の男が入ってきた

「登優河だよろしく！」

転校生は言った

「優河！」

勇輝は言った

「知り合いか？」

先生は言った

「じゃ、席は勇輝の隣で」

先生は言った

「はい」

優河は言って

勇輝の隣の席に座った

「なんで。ここにいるんだ」

勇輝は聞いた

「気分的に」

優河は言った

「は？」

勇輝は言った

一時間目は体育だ

「えー今日は陸上やります。百メートルと高跳びやります」先生は言った

「へっ。1位はもらったぜ」

勇輝は言った

「ひゃっはっは。1位はもらったぜ」

優河は言った

まずは百メートル

圭一が走った

「ちくしょー13秒2だ」

圭一は言った

「次は俺と優河だ」勇輝は言った

「負けねえ」

優河は言った

そして、

二人は走った

ほぼ同着だ

「勇輝12秒20、優河12秒19」

先生は言った

「ちくしょー負けたー」

勇輝は言った

「へっ俺の勝ちだな次は高跳びだ」

そして高跳び

みんな

1メートル40センチ から跳んでいた

「勇輝と優河まだ跳ばないの？」

圭一は言った

「低すぎる！」

二人は同時に言った 「うそー」

圭一が跳んで戻ってきた

「くっ1メートル45か」

圭一は言った

「大輝、すごいな今1メートル65センチだぜ」

圭一は言った

大輝とは同じクラスの勇輝たちの友達だ 「あ、大輝落とした60かすごいな」た

「勇輝と優河は跳ばないのか？」

みんなが勇輝たちの方を見た

「じゃ跳ぶか」

二人は言った

「じゃ70からで」勇輝は言った

「は？跳べんのか？」

大輝は言った
すると

勇輝は助走距離をすごく短くとった
すると、

三步で70を跳んだ

「うそ、たった三步の助走で跳んだ」

大輝は言った
すると、

優河も三步でとんだ 「すげえあの二人」みんながざわついた
しばらくやって

1メートル80センチに高さが上がった

勇輝は一発で跳び

優河は跳べなかった 「くそっ負けた」

優河は言った

「へっへっへっ俺の勝ち」

勇輝は言った

「すごいな二人共普段なにしてんだ？」 大輝が聞いた

「ナンパ！」

二人は言った

「えー」

数学の授業

「やっぱ運動もバトルしてたから数学もバトルかな」

大輝が圭一に聞いた

「さあ」

圭一は言った

「勇輝！数学勝負だ」

優河が言った

「よっしゃ！じゃ問題多く解いた方が勝ちだ」

勇輝は言った

五分後

圭一は勇輝たちの方を見た

「くか」

二人とも寝ていた

「起きろー二人共」

先生が言った

「ああおはよう。」 勇輝は言った。

「だめだこりゃ」

圭一は思った

そして、

放課後

「部活か、優河も陸上部だろ？」

圭一は言った

「めんどい。サボる」

勇輝は言った

「俺もまだいいや」優河も言った

「てか勇輝部活いってんのか？」

圭一は言った

「じゃ！」

二人は走って行った

「絶対行っていないなあいつ」

2007年…

勇輝は考えていた

「ああ、俺は人間になりたい」
すると、

蜘蛛のスパイダーファンガイアが目の前に現れた

「貴様が龍族の生き残りか」

ファンガイアは言った

「それがどうした？」

勇輝は言った

「ふん。消えろ」

ファンガイアは言った

「消えるのは貴様だ」

Ready

「変身」

first on

勇輝はイクサになった

イクサはファンガイアに殴りかかった
するとファンガイアも殴ってきた

イクサは交わし
ファンガイアにキックをくらわした
二発あてた

「くっ」

ファンガイアは倒れた

「やるな」

ファンガイアは言った。

「覚悟しな」

イクサは言った

「ふっふっふこれならどうだ？」

ファンガイアは言った

なんと圭一が糸で縛られている

「圭一！」

勇輝は叫んだ

「ふっふっふ、こいつを放してほしければイクサをよこせ」

ファンガイアは言った

「くっ」

勇輝は言った

2008年：

スパイダーファンガイアが暴れまわっていた
すると、

勇輝と優河がきた

「貴様、竜族の…」

ファンガイアは言った

「はあ？なにワケわかんないこと言ってるんだ？キバット！」

勇輝は言った

「こっちもいくぜレイキバット！」

優河はよんだ

「よっしゃ〜キバツテいくぜ」

キバツトは言った

「よっしゃ〜俺の出番だいくぜ」

レイキバツトは言った

「変身！」

勇輝はキバに

優河はレイに

変身した

二人は殴りかかった

ファンガイアはこけた

「おい！こい！」

ファンガイアは叫んだ

すると、ホースファンガイアが出てきた

キバはスパイダーファンガイアと戦い

レイはホースファンガイアと戦った

キバはファンガイアの後ろに周り込み

パンチしまくった

すると、ファンガイアはこけ、糸をはきだした

「くっなんだこりゃ」

キバは言った

「絡まったか死ね！」

ファンガイアは言って近づいてきた

ファンガイアはキバの前到了きた

「今だ！」

キバは言った

「なに？」

ファンガイアは言った

「ウエイクアップ！」

キバットが言い

キバの右足のカテナが解き放たれ

ファンガイアにキックした

「な、なに！ぐはっ」

ファンガイアは爆発した

「やったぜ」

キバは言った

レイはパンチをしまくりファンガイアを蹴り倒した

「へっ口ほどにもねえ」

レイは言った

「そろそろ決めるか」

レイキバットは言った

「ああ、いくぜ」

レイは言った

「ウエイクアップ」レイキバットは言うのとレイの両手にでかい爪が出てきた

レイはその爪で

ファンガイアを斬り倒した

「ぐはっ」

ファンガイアは爆発した

「俺！最強！」

レイは言った

「終わったか？」

キバが来て言った

「ああ楽勝だ」

レイは言った

「そういえば。まだ俺達ケリつけてないな」
キバは言った

「やるか」

レイは言った：

2007年：

「くっくそ」

イクサは変身を解き イクサナツクルを
ファンガイアに渡した

「はっは。それでいい」

ファンガイアは言うと

人間になり、

圭一を放した

「大丈夫か？」

勇輝は言った

「ああ」

圭一は言った

「変身だ」

ファンガイアは言った

Ready

fight on

ファンガイアは

イクサになった

「なに！」

勇輝は言っ

イクサに殴りかかった

しかし、

イクサはびくともしない

「ふん。そんな程度か」

ファンガイアは言って、

勇輝を弾きとばした

「勇輝！」

圭一は言った

「くそっ仕方ない圭一今まで黙っててすまん…」

勇輝は言った

「え？」

圭一は言った

勇輝は立ち上がり

叫び声を上げた

すると

勇輝の体が炎に包まれ

赤く、竜に似た。怪物になった

「うそ…」

圭一は言った

すると、

勇輝はイクサに殴りかかった

「ぐはっ」

イクサは倒れ、さらに勇輝は踏み潰した イクサは立ち上がった

「くっ」

イクサは言った

「グオオオオオオオ！」

勇輝は叫んだ

すると、右足が炎に包まれた

勇輝は飛び上がり

イクサに蹴りをいれた

すると、

イクサは倒れ

変身が解けた

「ひい」

ファンガイアは

イクサナツクルを置いて逃げ出した

勇輝は人間に戻った

「勇輝：」

圭一は言った

「すまん。黙ってて：」

2008年：

レイとキバは戦っていた

キバはパンチすればレイもパンチ

レイがキックすれば キバもキック

お互い互角の戦いだ

「やるな。勇輝」

レイは言った

「お前もな優河」

キバは言った

「ならいくぜウエイクアップ」

レイキバットは言った

「ウエイクアップ」

キバットは言った

キバは飛び上がり

蹴りを、

レイも飛び上がり。爪で向かっていった

二人はぶつかった

「負けるか！」

レイは言って

少し押した

「負けるかバカヤロー」

キバは言って

また押した

「負けるかバカヤローこのやろー」

レイは言って、

押した

「負けるかバカヤローこのやろーくそやろー」

キバは言って

押した

「負けるかバカヤローこのやろーくそやろーカスヤロー」

レイは言って、

押した

「負けるかバカヤローこのやろーくそやろーハゲやろー…」

キバは言った

「いい加減にしろー」

I X A c a r i b e r
r i s u p

イクサが言って

斬りかかってきた

「なにー！」

レイとキバは言った

三人のライダーが激突し

爆発した…

すると、

三人は人間になって倒れていた

「はあ。引き分けか」

優河は言った

「ちえっ」

勇輝は言った

「なにやっぺんだお前ら。勘弁してくるよー」

圭一は言った

「はあ疲れたお？」 勇輝はうつ伏せになった

「どうした？」

圭一は言った

「前、あの女子高生…こっからだに見える…」

勇輝は言った

「なにが？」

圭一は言った

「本当だデヘヘ」

優河は言った

「パンティーだ白か左が青で真ん中がピンクか、いいなやっぱり」

勇輝は言った

「ああ、パンチラ最高」

優河は言った

「お！てなに見てんだよ」

圭一は言った

すると、

女子高生の一人が勇輝の前に近づいつきた

「ねえねえ。今夜暇？私と。あ、れ、やんない？」

女子高生は言った

「あれって？」

勇輝は言った

すると、

いきなり勇輝を抱き締めた

勇輝の顔は胸の間に挟まっていた

「お、ね、が、い」女子高生は言った

すると、

勇輝は手で女子高生の胸を触ろうとして

「喜んで」

といった

すると、

圭一は勇輝と優河を引っ張って

連れていった

「なにすんだよ〜いいとこだったのに」勇輝が鼻血を出して言った

「あいつ。あの女子高生たしか名前は泉山佐知子。あいつに誘惑された男はみんな帰ってこなかったって噂が」

圭一は言った

「はぁ？ まじかよ」優河は言った

「危なかったな。てかその話本当か？」勇輝は言った

「ああ、実際にいなくなってるもしかしたらファンガイアが関わってるのかもあの娘を利用して」

圭一は言った

「許せねえファンガイア俺がぶっ飛ばしてやる」

勇輝は言った

「本当だぶっ殺すあんなかわいい娘を利用するなんて」

優河は言った

「まあ、捜査してみるか」

圭一は言った

「おう！」

三人は叫んだ

ここは

ある倉庫の中

「キバか…」

一人の男が言った

「キバ、やつは俺が倒す」

なんとルークがいた 「はっはっはこれから真の戦いだ！」 一人の男が不気味に叫んだ…

第6話…もう一人の天才（後書き）

すみません。

最後の方不適切で笑 次回！ついにルークと…

第7話 新たなる強敵（前書き）

すみません

まじ最近部活とか忙しくて更新できませんでした
読みにくいところあるかもしれません

久しぶりに書いたので感じ忘れてるかも

第7話 新たなる強敵

2008年：

「今夜。ホテルに來いだって」

勇輝は言った

「だれがいく？」

圭一は言う

「俺だろ」

優河が言った

「お前ただ行きたいだけだろ」

圭一は叫んだ

「約束したのは俺だ：今夜楽しみだな」

「お前ファンガイア倒すんだぞ！」

「わかってるって」勇輝はニヤニヤしながら言った

「大丈夫かな」

2007年：

圭一と勇輝は互いにただ見つめ会っていた

「勇輝」

「すまなかったな本当に俺、龍族なんだ」

勇輝は言う

「そうだったのか。だけど勇輝は勇輝だよな！」

圭一は叫んだ

「俺は怪物だ、お前は仕事があんだろ」勇輝は言う、イクサナツクルを圭一の前に落とした

「え」

「それで俺を倒すんだろ。」

「なんで戦わなくちゃいけないんだ」

「お前が戦士なら当たり前だろ化け物を倒すなら」

「違う、勇輝は化け物じゃない」

圭一と勇輝は言いあった

「そっか」

勇輝は言うのと去っていった

「勇輝…」

2008年…

「どこだ？」

勇輝はホテルの前にきてた

「ここよ」

泉山佐知子が手をふってこっちに近づいてきた

「よろしくね」

泉山は言い、

勇輝に寄り添った

「めっちゃかわいい…」

勇輝は思った

泉山と勇輝は地下駐車場に行った

「ホテルじゃないのか？」

勇輝が尋ねると

「でっかいベツトつきの車があるの」

泉山は行った

「ベット…」

勇輝は…

もうファンガイアのことは忘れてしまっているようだ

「ここよ」

泉山は言う

車が止めてあった

トラックだった

トラックに入ると

明かりがつき

ベットがあった

「さあはじめましょうか」

「うん…」

お互いに服を…

ここからは想像に任せる笑

30分くらいたったすると、

トラックに銃弾が放たれた

「危ない！」

勇輝は銃弾の音に気づき交わした

「やはりなファンガイアか」

勇輝は外にでて言った

「はん。わかっていたかお前何者だ？」
銃を持ったファンガイアが立っていた

「俺はキバだ、貴様この娘を利用して男たちを殺してたな」

勇輝は言った

「ふん。そいつの弟を預かっていてな。作戦に協力してもらってたんだ。バカな男たちはまんまとはまりおったわ。」
ファンガイアは笑った

「佐知子ちゃん…さがってて」

勇輝は言った

「はじめから私を助けるつもりで…」
佐知子は言った

「まあな。キバット！」

「よっしゃー！キバっていくぜ」

キバットがきた

「ガブリ！」

キバットは勇輝の手にかみついた
「変身」

勇輝はキバになった

「おのれーキバ！」

ファンガイアは

キバに殴りかかった

しかし、キバは交わしパンチをくらわせまくった

「へっ！そんなのきかねえよ」

キバは言った。

「ならば」

ファンガイアはキバと距離を離し銃を取り出し撃った

キバは銃弾をくらった

「ぐはっ」

キバは倒れた

2007年：

勇騎は悩んだ

「俺はこれから…」

勇騎は呟くと

ファンガイアが現れた

「貴様、龍族の生き残りだな」

ファンガイアは言った。

「だったらなんだ…もう無理に性格を隠す必要ないか」

勇騎は言った

「ふん。殺す」

ファンガイアは剣を取り出し勇騎に襲いかかった

勇騎は龍人に姿を変えた

勇騎は交わし

ファンガイアに蹴りをいれた

「くだらん」

勇騎は言い、

手から火の玉を出しファンガイアに当てた

「くはっ」

ファンガイアは倒れた

ファンガイアは逃げ出した

「勇騎…」

圭一がきた

「圭一か、」

「ああ、」

「俺を倒しにきたか」

「いや、違う！俺はただ」

圭一と勇騎は言い合った

「お前は俺らみたいのを倒すんだ」
勇騎は変化した

「やるしかないのか」

圭一はイクサに変身した

2008年…

キバは銃弾に苦戦していた

「バツシャーマグナム！」

キバットが笛を吹き キバはバツシャーフォームになった

「いくよ！ いい？」

キバは水の銃弾を打ちまくった

「なに！」

ファンガイアは言って銃で撃った

激しい撃ち合いでファンガイアは倒れた

「決めるか。バツシャーバイト！」

キバはファンガイアの周りに水をしき

水の上を滑るようにしてファンガイアの周りを周り、

銃を撃ちまくった

「ぐはっ」

ファンガイアが叫んだ

「とどめだ」

キバは言いでかい銃弾をファンガイアに撃った

「ぐはー！」

ファンガイアを倒した

キバは勇騎に戻り

奥に閉じ込められていた佐知子の弟を助けた

「ありがとうございます助けて頂いて」

弟は言った

「ありがとうございます。本当に」

佐知子も言った

「よかったな助かって」

勇騎は言った

「またやろうな」

勇騎は佐知子に言った

「え…」

佐知子は言った

「冗談だよ」

勇騎はそう言いながら別れを言い去っていった

「あの人となら…」

佐知子は赤くなった

勇騎は歩いていると

長髪の男が歩いてきた

「貴様か？ キバは？」

男は言った

「なんだお前？」

勇騎は言った

すると、男はファンガイアになった

「俺はチェックメイトフォーに一人ルークだ！」

2007年：

イクサと勇騎は戦っていた

「もうやめよう、俺らは仲間じゃないか」

圭一はいった

「しかし俺は怪物だ」

勇騎は言った

「確かに怪物かもしれない。でも人間として生きる事はできるだろ
！」

圭一は言った

勇騎は手を止めた

「人間として？」

「そうだ人間として生き、戦うんだイクサで！」

圭一は言った

「わかった」

勇騎は人間にもどった

「ありがとう。俺は間違ってたらしい」

「これからもよろしくな」

勇騎と圭一は握手した

2008年…

「チェックアウトフォー？」

勇騎は答えた

「違う！チェックメイトフォーだ！」

ルークは言った

「まあいいや。今の俺は最高にキバってるからなキバット！」

勇騎は言っ

「勇騎気をつけろ！なんかこいつ今までのファンガイアと違う」

キバットは言っ

勇騎の手に噛みついた

「関係ねえよ！最強は俺だ！」

勇騎はキバになった

「いくぞ」

キバはルークに殴りかかった

しかし

ルークは交わさず

キバの連続パンチを食らっても平気そうに立っていた

「きかないな」

ルークは言い

キバを殴りぶっ飛ばした

「ぐはっ」

キバは倒れた

ルークは黒い玉をたくさん撃ってきた

キバは叫び声を
あげ勇騎に戻った：

第7話 新たなる強敵（後書き）

これからキバって更新できるように頑張ります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9751e/>

仮面ライダーkiva

2010年10月9日07時16分発行